淫魔契約　～絶倫どエロ淫魔に愛されて～

ショートストーリー　恋人は淫魔

特典ドラマ（トラック９）の後日談

居酒屋特有のざわめきの中、彼は私だけに聞こえる声で囁きかけ、甘い吐息を耳に吹きかけてくる。
「ねえ、もう帰って俺とイイコトしよ」
「っ……」
「お前だって、いつまでもこんなとこいるより、早く俺とシたいって思ってるよね？」
その言葉には返事をせず、
「すみません、ちょっと失礼します」
と席を立ち上がるとトイレに向かった。
「あー、やっとその気になった？」
ついさっきまで不機嫌だった彼は鼻歌を歌いながらついてきて、トイレの個室に入った瞬間姿を現した。
「もう、アシェル、今日は邪魔しないって約束だったでしょ？」
背が高い彼を見上げると、不敵な笑みを浮かべている。
「別に、邪魔してるつもりはないけど。だいたいさ世話になった上司の送別会って言ってたけど、ホントにアイツに世話になったわけ？」
「……それはもちろん」
「へえ、付きまとわれて迷惑そうにしてたと思うんだけど、それって俺の勘違い？」
「っ……それとこれとは話が違うの」
「はあ、人間ってホント意味わかんないよね」

「とにかく、あと３０分くらいしたら帰れるから、アシェルはもう何もしないで、わかった？」
「ふーん……あっそ」
私が少し強めに言ったせいか、アシェルはまた不機嫌そうに姿を消してしまった。
（言いすぎちゃったかな……）
胸がチクリと痛んだけれど、自由奔放すぎる彼はちゃんと歯止めをかけておかないと何をしでかすかわからない。
（あとで謝ろう）
そう思いながらトイレを後にした。
それから1時間ほどで送別会はお開きになり、挨拶をして立ち去ろうとすると今日の会の主役だった上司に話しかけられた。
「あれ、もう帰るの？　もう少し飲みたい気分だから付き合ってよ」
「っ……あの、私もう帰らないと……」
「一緒に飲めるの、今日が最後かもしれないしいいじゃん」
強引に腕を取られ、上司に引きずられる私の耳にアシェルが舌打ちをする音が届いた。
（私も帰りたいんだけど……本当にごめんね！）

◇　◇　◇　◇

他にも人がいると思っていたのに気つけば上司と二人きりになっていて、怪しげな灯りが瞬くあた

りに来ていた。
「引っ越したらなかなか来れないから行っておきたい店があるんだよね」
そう言ってたので、上司の案内に任せて来てしまったけど急に不安に襲われる。
「行きたい店って、本当にこの辺りなんですか？」
「うーん、そのはずなんだけど……酔ってるから道間違えたかな？」
上司は私の肩に腕を回して寄りかかってくる。
「つーか、本当に飲みすぎたかも。ここで休憩してこうよ」
突然、すぐ近くにあったラブホテルの入口へと引っ張られた。
「っ、何言ってるんですか！？　やめてください！」
「ここまでついて来たんだから、君もそのつもりなんだろ。本当はエロい女って知ってんだよ」
アルコール混じりの生温かい息がかかり、ゾワッと寒気がした。
「本当にやめてください！」
「うるせえ、デカい声出すな。最後に一発ヤラせろよ」
到底酔っているとは思えない強い力で引かれ、
「アシェル！　助けて！」
とっさに叫んだ瞬間肩が軽くなった。
「ったく、何やってんの？　もっと早く呼びなよ」
振り向くと、アシェルが上司の片腕をひねり上げている。あろうことか、上半身は裸、角と翼まで出したいつもの姿に、めまいがした。その場にいるの

が3人だけで、他の人に見られる心配はなさそうなのがせめてもの救いだったけれど。

「いたたたっ……離せ！　まだ何もしてないだろ」

「まだ？　へえ、やっぱ何かするつもりだったんだ？」

「いや……ただ本当に休んでいこうと思っただけで……痛っ、お願いだから離してくれ！」

「アシェル、離してあげて」

彼は舌打ちをしながら掴んでいた腕を離した。いつも飄々としているからこんなに苛立っている姿を見るのは初めてで、鋭い瞳に見下ろされるとその迫力に圧倒される。

（っ、すごく怒ってる）

上司は乱れた上着を直しながら、アシェルを見て目を剥いた。

「っ、裸……っ、角？　えっ、翼？　お前、一体何なんだよ！」

「俺、お前が襲おうとしてた女の恋人だけど？」

（恋人！？　って、はっきり言われたの初めてかも）

すでに腰が引けていた上司は「誘ってきたのはそっちだろ」など何事か言い訳をしながら、そそくさと立ち去った。

「アシェル……ありがとう……っ！」

「っ、おっと……！」

目が合った瞬間に安心したのか、急に腰が抜けそうになった私をガッシリと支えてくれる。

「しょうがないな。ここで休んでくよ」

そのままラブホテルに入ろうとする彼を慌てて

止めた。
「っ、待って！　角と翼はそのままじゃダメだよ」
「んっ？　ああ、コレ出しちゃダメなんだっけー」
アシェルは言いながら、瞬時に角と翼を消した。

◇　◇　◇　◇

部屋に入るなりベッドに組み敷かれて、恋人繋ぎに絡まった手を顔の横に縫い留められる。
「ねえ、お前さ……無防備すぎるんじゃない？　俺が現れなかったらどうするつもりだったの？」
「っ……本当にごめん」
「だから、俺が帰ろうって言った時に帰ればよかったんだよ」
「うん、ごめん……」
「はあ……お前は自分が誰のモノなのか、まだちゃんと理解してないの？」
湿った舌がねっとりと耳の中に入り込んでくると、下半身がゾクゾクと疼いた。さっき上司の息がかかった時は気持ち悪くてしょうがなかったのに、アシェルに耳を舐められただけで官能的な気分にさせられる。
「お前の事、エロい女って言ってたけど、一体アイツが何を知ってるの？　少しの刺激でこんなに身体が反応するのは俺が相手だから、だろ？」
大きく熱い手が身体をなぞっていく。服の上から触れているはずなのに、もう素肌を愛撫されている感覚にビクビクと身体が震えてしまった。

「はあ……今、気が立ってるから容赦できないと思う。覚悟して、んんっ……」

唇を覆われ、口内に舌が入り込むとなまめかしく絡め取られる。

「んっ……」

息も継げないほど激しい動きに必死で食らいつくと目じりに涙が浮かんだ。一度口を離したアシェルは、指で涙をすくい、それを長い舌でぺロッと舐める。

「ふっ……」

満足気に笑うとまたすぐに口を塞がれた。

裸にされ、胸をこれでもかというほど攻められた私が一度絶頂に達したところで、アシェルは電動マッサージ機を手にしていた。

「ラブホって初めて来たんだけど、こんなものまで置いてあるんだね。お前が持ってるおもちゃと似てる」

「っ、うん……でも、それはマッサージ機だよ。身体に当ててコリをほぐすの」

「マッサージ？」

アシェルがスイッチを入れるとブーンと鈍いモーター音が響き、マッサージ機が振動を始める。

「へえ、これ、お前のクリトリスに当てたら、気持ちいいんじゃない？　やってみようよ」

そう言って、私の足を大きく開くと中心へ押し当てた。

「っ、んっ、あっ！」

かする程度に触れたり、強くしたり……もっとして欲しいと思うと軽い刺激に戻したりと焦らされて、どうしようもないほどに濡れてくるのが自分でもわかった。

「くくっ、すごーくよさそうだね」

「んっ……気持ちいい」

「はあ、エロい匂い。たまんない……指も入れてあげるよ」

今度は長い指が内側から感じるところを攻めてくる。入っている指は一本なのに、浅い所も奥深い所も次々に刺激され快感の波が押し寄せてきた。百戦錬磨の淫魔が持つテクニックに脳内まで支配され刺激を追い求める。

「ふっ、指しっかり咥えこんでる。おもちゃはもういらないよね」

アシェルは電マをポイッと放り出し、私の足の間に顔を埋めた。

「えっ、ちょっと……っ、んっ！」

熱くて柔らかい舌が硬くなった部分に絡みついてくる。変幻自在な彼の舌は急に硬く尖り、舌先で転がされる。

「ふっ、クリ舐めるとナカがギューって締まる。ほらっ、こうやって、んっ……」

舌でねっとりとなぶられながら、敏感な突起に吸いつかれ背筋がゾクッとした。

「ぁ、んんっ、アシェル……こんなの無理だよ」

「無理じゃないでしょ。チュッ、あむっ……お前はもう俺じゃないと満足できないんだから、んんっ」

感じる所を舐めながら話すと熱い息がかかり、それすらも快感に変わっていく。
「あっ、くっ……んんっ……」
激しく舐める音がハッキリと耳に届き恥ずかしさでいっぱいなのに、
（やめてほしくない……）
いつも容赦ない舌技に翻弄されてるおかげか、彼が言う通りすでに他の人では満足できない身体に変えられている。
（アシェルが欲しい……アシェルじゃないと満足できない）
長い指でも届かない、身体の奥が淋しさでキュウっと疼いた。
「アシェル、もう……」
「んっ……俺が欲しくなっちゃった？」
足の間から顔を上げた彼は色っぽい表情で微笑む。必死で頷くと大きな体躯が覆いかぶさってきた。
「ホントはもっとちゃんとねだって欲しいんだけど……俺も、今すぐ欲しい」
言葉と同時に大きくて熱い塊が体内に入り込んでくる。何度しても慣れることはない圧迫感だけど、心も身体も満たされ感動に似た気持ちまで湧いてくるのが不思議だった。
「ほらっ、キスするよ」
舌の動きについていこうと自分からも絡めると、アシェルが嬉しそうに笑い腰を揺すり始めた。
「っ、はあ……」
彼のモノは本当に大きくて、硬くて、熱くて、少

し動いただけでも私には何倍もの刺激になる。朦朧としながら見上げると、アシェルの顎のラインを汗が滴った。自然とそこに手を伸ばしていて、気づいたアシェルが手を取り指先にキスを落とす。

「ふっ、どうした？」

「っ……！」

その仕草と少し余裕のない表情に胸が高鳴る。

「っ、アシェル……！」

彼の首の後ろに手を伸ばして抱きしめると、強く抱きしめ返され自然と唇が重なった。

「っ、はあ……お前、可愛いね」

キスの合間に囁かれ、腰の抽挿が早くなると、絶頂の波が迫ってくる。

「んっ、イきそ？」

返事をするのもままならなくて頷くだけの私に、さらに腰を打ちつけてきた。

「んっ、アシェル……もう……！」

「いいよ、イきなよ」

いつもするように私が絶頂を迎える時に、彼はキスをしてくれる。

「あっ、イく……！」

アシェルが最奥を突いた瞬間に果てると、奥がギューと締まり、心臓がドクドクと脈打つ。

「っ、はっ、すごいきっつ……俺も、出すよ。くっ、はあ……」

私のすぐ後にアシェルも射精すると、熱いものがほとばしるのを感じた――……。

絶頂の余韻に浸っていると、アシェルがまた抽挿を始める。

「っ、ちょっと待って……！」

「ふっ、俺がこれだけで足りないの、お前ならわかるでしょ」

「でも、お願いだから少しだけ休ませて」

「んっ、無理……俺の初めてのラブホ記念日なんだから、朝までちゃんと付き合ってよね」

そう言って笑った淫魔で恋人の彼は、私にたくさんのキスをくれた――……。

おわり